

湘紅会報 2022年7月 第8号

設立 1991年 会員 96名(80.1才)年2回発行

コロナ感染に注意、慎重に活動中

今年になりコロナ感染者数はピークアウトしたが、高齢者の予防意識は緩んでいない。湘紅会は、野外活動の**万歩会**（上半期5回実施平均12名参加）**ゴルフ会**（3月第一回17名参加）のほか、各部会慎重に対応続けている。

世話人会 6月23日(オンライン)開催

全世話人参加し次の通り決めた。



- ① **2022年度世話人の承認**（別記）。
- ② 事務局を**総務に名称変更**。会の企画運営に深く関与している実態に合わせた。
- ③ **要覧の内容を改善**。会報8号と共に7月に会員へ郵送。
- ④ **湘遊会世話人交代**と新方針承認。
- ⑤ 囲碁部休部承認。
- ⑥ 総会、来年3月に鎌倉「二楽荘」で開催。

2022年度世話人

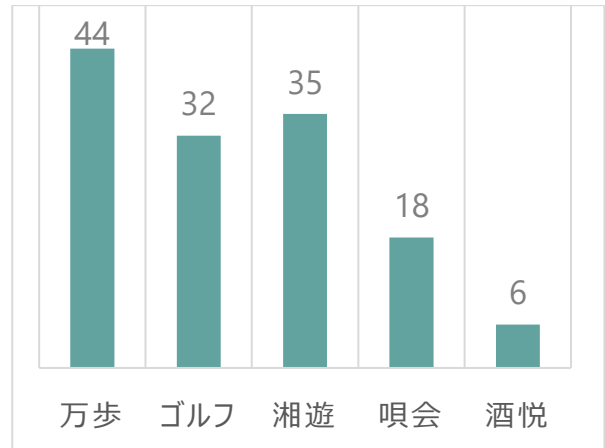
代表世話人：酒井尚平

世話人：有地幸雄 倉上雅彦 川嶋寿彦(新)
相田康宏(総務) 塩川明男 宮田 廣

総務(旧事務局) から

湘紅会に関する意見、連絡、総務・相田康宏
yaita1947@nifty.com 宛てお寄せください。

部会登録会員 (2021年度)



湘遊会の世話人交代と活動の多角化

発足四年目の湘遊会、世話人が青山勝氏から川嶋寿彦氏に交代した。部会世話人は甲斐修二、長沼徹、斎藤正視の諸氏。美術、歌舞伎、落語で実績を重ねてきたが、音楽、スポー観戦を加え、世話人は全分野をチームで運営する。初回は7月に上野西洋美術館の「自然と人のダイアログ」、モネ、ゴッホからリヒターまでを鑑賞予定。（その後、コロナ感染拡大のため、中止）秋に市川團十郎襲名公演ほか、検討中。

会員随想

山下公園でクジラが泳いだ 青木平衛

1932年、私が3歳の年に横浜・山下公園を舞台に復興記念横浜大博覧会が行われた。

関東大震災（1923年、大正12年）では横浜の被害家屋は約9万4,000戸、罹災人口はおよそ3万3000人（死者・行方不明者

2万3000人以上)とされています。横浜市は復興事業の一環として震災被害の瓦礫や焼土で海岸部を造成、山下公園が日本で最初の臨海公園として誕生したわけです。博覧会会場は山下公園(約10万平方メートル)、期間は2か月間(3月26日~5月24日)で被災地の各県の出展館(一号館から5号館まで)を中心にパビリオンが林立し、会期内に訪れた人数は350万人以上と記録されています。私はその博覧会に行った記憶がおぼろげながら残っているのです。3歳の子供のことですから誰と行ったのか、何を見て何をしたかはっきり覚えているわけではありませんが、大きなプールがあり、その中でクジラが泳いでいたのを見た記憶がうっすらと残っているのです。それで本当にクジラがいたのかどうか、知りたくて当時の横浜大博覧会の記録を探してみましたが、生きたクジラを展示したと言う記録は残っていません。

本当にクジラがいたのか、市やPCの資料にも載っていないのでは、幼かった子供の思い込み(メルヘン)と諦めていた所、今年10月の緊急事態宣言解消で久しぶりに顔を見せた孫に、この話したところ、スマホをたたいて「お祖父さん、ここに出てよ。」

会場内の船溜まりにクジラが入れられたり、生簀に入れられたクジラを見たりかなり派手な博覧会だった」と書いてあると教えてくれた。「横浜大博覧会」の記録で探しても見つからなかったクジラが若者の手にかかると簡単に見つかったのは驚いた。「公園探訪：山下公園」で探したと言う。

いずれにしても僕の「あわい記憶」の中にあつた【クジラが山下公園のプールを悠々と泳いでいた】のは、間違いなかった。!!。長年に涉ってもやもやした気持ちが一辺に晴れ渡った瞬間でした。

三浦市のこと

別府義臣

相模国さがみのくに(神奈川県)の三浦半島は、まことに小さい。この半島からみれば、東の房総半島などは、大陸のように見える。また、西の伊豆半島からみても、はるかに小さい。(司馬遼太郎の街道をゆく)。その半島の先端に三浦市があります。三方を海に囲まれ。気候は温暖で農業が盛んです。野菜は大根、キャベツの生産量が多く、三浦大根は大正時代に産地化されましたが、近年は青首系が主流です。漁業は、三崎漁港のまぐろの水揚げ量が、冷凍技術の発達もあって全国有数になりました。「三崎マグロ」としてブランド化しました。ほかに松輪のサバ、キンメダイ等近海物もたくさん揚げます。

歴史のエピソードを二つ紹介します。この半島から十二世紀末、鎌倉幕府が出現しました。三浦は頼朝の拳兵を支援した三浦大介義明とその孫、和田重盛の勢力下にあり、その為、頼朝の別荘がありました。NHKの大河ドラマの主演、北条義時も来遊しています。今でも「歌舞島」という地名が残っています。二つ目は、江戸末期、日本の近海に出没する外国船が多くなり、幕府は「外国船打払令」を発令し、南下浦に「海防陣屋」が設置されました。この陣屋は各藩が交代で管理していて、長州藩が当番の時、若き日の伊藤博文や木戸孝允が衛士として務めていました。2014年7月「小網代の森」が整備され一般開放されたのは、嬉しいことでした。ここは約70haの小さな森ですが、シダの密生する源流の森から、中下流はアシ、オギの大湿原、そして西に延びる河口の干潟まで川に沿って緑が一面に広がっています。関東唯一の完結した「流域生態系」として貴重な所です。万歩会でも2016年に散策しています。

沖縄病

杉山民夫

1990年4月から3年間那覇支店に勤務した。初めての土地での業務担当だったけれど任期終了時には沖縄が大好きになり忘れられなくなる病、俗に云う「沖縄病」に感染していて今なお病状に変化がない。

沖縄には興味深い風土・歴史・文化（飲食を含めて）があるが同時に豊かな人間性があり、これらが一体となって沖縄病の要因となった。まずは泡盛。最初の一口から愛飲者となりウチナンチュウとの交流に大いに役立ってくれた。真に幸運な出会いであった。そして多くのウチナンチュウが持つ優しいおおらかな人間性がある。その原点は「なんくるないさ」と云うウチナーグチ（沖縄言葉）に代表されるようにお見受けする。訳せば「なんとかなるさ」だが、投げやりとか自分勝手とかの後向きの意味合いではなく、逆に「あせっても良いことない、ゆっくり行こうよ。苦しいのは皆同じ、何事も途中で投げ出さないで精一杯生きようよ」との前向きな考え方で人生の指針となっている。

裁監督率いる沖縄水産高校が1990・91年連続して夏の甲子園で準優勝した。90年は天理、91年は大阪桐蔭に決勝戦で敗れ悔しい思いをした。沖縄ならではの忘れ難い思い出がある。沖縄水産の試合が始まるとTV観戦の為街中が静かになる。試合の最中、お客様を空港にお送りした。普段は渋滞続きの幹線道路がガラガラ。空港ではタクシー乗り場に長蛇の列。運転手が仕事を中断してTV観戦と云う次第。沖縄電力の話では地元チームの試合が始まると消費電力量が落ちる由。当然TV電力量は増えるのだが、それ以上にTV観戦の為

操業を一時中断する工場がもたらす現象とのこと。知人ご子息の結婚披露宴に招かれたことがある。会費制で、かりゆし着用。会場は大きな丸テーブルが10台程。仲人の挨拶に続くのは親戚・学友・職場仲間のグループによる琉球歌謡と舞踊、その芸達者に驚く。一転して新郎のオバアが一人舞台に立ち祝いの舞を静かに踊る。これに新郎新婦が加わり徐々に盛り最後は全員参加のカチャーシーで華やかに終わる。質素ながら心温まる披露宴だった。滞在中に新しい首里城が完成した。

その最終工程で屋根に乗せる赤瓦の一般公募があり、私も1万円を寄贈、裏面に私の名前が書かれた一枚の赤瓦が南殿（正殿に向かって右側の建物）の屋根に収められた。この首里城は学術的にも素晴らしい建築物で2000年世界遺産にも登録された。その誇るべき首里城が2019年10月ほぼ全焼した。翌年2月無残な焼け跡を見学、後世に残るべき我が赤瓦も灰塵と化していた。その後、復元に向けて検討が進み、2026年完成を目標とする事業計画が決定し既に一部の基礎工事が始まっている。2026年は生き長らえていれば米寿の歳。復元首里城見学を残る人生の大きな目標とし、沖縄病治療の一つとすることが出来ればと願っている。

ヤクルト優勝日本一

豊中和雄

2021年11月27日、Jリーグの中で行われた2021年度のJリーグで、野球関係者、野球ファン誰もが考えもしなかった事が起こった。2年連続リーグ最下位だった我が愛するヤクルト球団がリーグ優勝を飛び越え、なんと20年ぶりに優勝、6

回目の日本一になったのである。今回も、まぐれと言われようが、なんとわれようが、この地味な弱小球団が各強力球団に勝ったのである。

本当に不思議なチームである。セ・リーグで優勝した6年前も前年、前々年2年連続リーグ最下位からのリーグ優勝だった。その後も、5位・6位・2位・6位・6位だったので、このチームは一体強いのか弱いのか。しかし、今回は、リーグを超え、日本一になったのだから今は強いのかもしれない。こんな喜びをヤクルトファンにくれたヤクルト球団、高津監督、コーチ、選手、球団職員達に心から感謝したい。野球は、7割が投手力というので、今回は、投手力の防御率等大幅な改善だったのが勝利の原点だったと思う。たかが野球と思わないで欲しい。真のファンは、この優勝で心に輝きが出て、気持ちが充実してくるものである。応援しているヤクルトが頑張っている、自分も負けずに頑張ろうと思うのである。本当に、自分自身が正直で単純な性格なのだからだろう。翌日、早速、近くの饅頭屋さんに駆け込み、リーグ優勝した時よりやや大きめの紅白饅頭を再び作ってもらい、リーグ優勝時に加え、近所と友人達に日本一優勝紅白饅頭を配った。

自分自身でも、なんでここまでやっているのかよくわからない。ヤクルト球団から1銭ももらってないのに自分の金で饅頭を作り、そして皆に配り、皆から、喜ばれ、私自身も楽しく、感激しているのだ。

これだけヤクルト狂になったきっかけがある。私は、長崎県出身であるが、母の従兄弟に初村滝一郎がいた。母も叔父も五島出身であるが、叔父の親友に同じ五島出身の松園尚巳氏という人がいた。その後、ヤクルト社長・東京ヤクルトスワローズのオーナーになった人である。私は会った事はないが、松園氏が長崎の豊臣秀吉と言われていた事は、よく覚えている。この頃からヤクルトを意識していたと思う。私

が、就職する時に叔父からヤクルト入社を勧められたが、当時のヤクルトはまだまだ小さい会社だったので断わった。弟はヤクルトに就職した。もし、私が丸紅ではなく、ヤクルトに就職していたら、ヤクルトスワローズの球団オーナーになっていたかもしれない。ヤクルト本社がこんなに大きくなり、世界的企業になるなんて当時は夢にも思わなかったものである。

ヤクルトが好きになり、狂ヤクルトになり、応援しているには理由がある。私は、野球が好きであったが、特に、今の様に“狂”ではなかったと思う。ヤクルトが“金満巨人”に勝てば、良かったと思う程度であったが、野球の見方を根底から変え、野球の神髄を見たのは、野村克也さんの登場であった。

解説者時代の『野村スコープ』である。鋭い解説で衝撃を受けた。当時のヤクルトは松園尚巳の下、ファミリー主義と明るいチームであったが、勝負への甘さがあり、長くBクラスに甘んじていた。1990年、その野村克也さんが我がヤクルトの監督に就任したのである。そして、徹底的に選手を鍛え、選手の間を磨き、9年間の在任中3度の日本一となった。この頃から私は、「ヤクルトファン」から「狂ヤクルトファン」になった。彼は、ヤクルトを変え、我々ファンを磨き、人生に通じる名言を残してくれた。沢山の名言の中で、私が好きなのは、『勝ちに不思議あり、負けに不思議なし』、『強者は勝者にあらず、弱者は敗者にあらず』、『失敗と書いて「せいちょう」と読む』、野村監督の下で沢山の名選手、人間的に素晴らしい選手が出た。その中で、私の尊敬している人がいる。「宮本慎也」である。一流の脇役になれと野村監督から言われ、ついには、大学出で、且つ、社会人出身であり、犠打の数も多いながら、ゴールデングラブ賞10回、2000本安打の足跡を残した。宮本選手は、難しいゴロもきっちり正面でさばいて、投手がいい気持ちで後を投げら

れる様守備の面でも工夫していた。野村監督が、プロ野球の中で一番監督にしたいと言わせた選手である。今はNHKの解説者をしている。

今のヤクルトは、野村監督の魂が首脳陣に伝わっており、その心が選手に伝わっている。勝負事なので、いつも勝つとは限らない。私たちにチームが魅力を与えてくれるのは、試合に対する取り組み方、人生と同じである。今回の優勝で、ヤクルト球団、選手、大きく成長して欲しい。常にAクラスにいて、これからも、私を喜ばせて欲しい。

『絶対大丈夫』今の高津監督の言葉である。

年 63 円の証明

川嶋寿彦

湘紅会報に何か寄稿との依頼があったが、コロナ禍で「チコちゃんに叱られる」状態で過ごしてきた身には特に寄稿の材料も見当たらず、困った!! たまたまその時、今年の年賀状の整理をしていたのでふと「年賀状」について書いてみようと思った。ここ20年ほどは家内分も合わせ、毎年400枚程年賀状を出状してきたが、お亡くなりになれる方も増え、又、「年賀状を卒業」される方も増えたりで受け取る賀状は徐々に減ってきた。それでも今年は350枚ほど頂戴した。ちなみに今年も3等のお年玉切手シートしか当たらなかったが、8本の収穫があった。当選を確認しながら改めて文面を読み直すと年初に慌ただしく読ませていただいた時とは異なるほのぼのとした味わいを感じさせてくれる。初めて賀状を出したのは小学生低学年の時だったと思う。担任の先生と仲良しの友達あてに数枚を手書きしたと覚えている。

会社に入ってから格段に出状枚数は増えたが、忙しさの中、宛名とせいぜい「謹賀新年」などと書

く程度だったと思う。1980年ごろ「プリントごっこ」なる簡易印刷機を購入し、裏面の挨拶はそれを用いて印刷することが可能となり、飛躍的に省力化することができた。さらに2000年前後からは我が家でもコンピューター化が進み、パソコンの中に住所録を取り込めるようになってからは枚数を増やすことへの抵抗感がなくなり、一挙に出状枚数が増加した。そのころから裏面のフォームを固定し、毎年、私と家内からの一言挨拶並びに子供達（最近は孫たち）の近況を織り交ぜるといった形を踏襲している。毎年、楽しみにしていただいている方もおられ、この一言挨拶は11月頃家内と二人で真剣に推敲を重ねているのが実情です。ちなみに今年の私の挨拶は以下の通り。

【寿彦 1月に腹部動脈瘤のステント内挿手術を行ったこともあり、年間ゴルフ回数は激減、それだけでなくヘボのヘボ度が益々上がりました。そろそろクラブを置く時期が近づいたかな?】

本年には私も後期高齢者の仲間入り、そろそろ年賀状出状を断念しようかとも考えましたが、頂いた賀状を読ませていただくと葉書の向こうの彼、彼女の息吹が感じられ、心が浮き立つ思いとなることもあり、受けられた方もそう感じて頂けるだろうと思い、年に63円の「生存証明」と割り切って今しばらく続けようかと思っております。

このたび、湘紅会の世話人をお受けし、湘遊会部会代表となりました。高齢化が進んでいます。会員の皆さまが、多様な活動を楽しまれるよう、四人の世話人で魅力的な企画をお届けするよう、努力する所存です。何卒、よろしくご協力いただきますよう、お願いを申し上げます。

湘紅ギャラリー



妙高笹ヶ峰 酒井尚平 2022 鎌倉美術展

湘紅俳壇

令和四年夏

鶯の初音に惹かれ姿追い

伊賀山欣也

さえずりを聞きつまどろむ露天風呂

卯の花腐し朝風呂の自由人

岡崎誠之助

聖五月上田桃子の真似をして

燕追ふ目はまだ確か八十路かな

山笑ふ淡い陽射しの読書かな

原知廣

余花みごと長野の旅の美人かな

あとがき

同期会を竹橋新社屋 2 階の喫茶店で開いた。窓からの皇居、高速側の風景は変わらなかった。

新鮮に映ったのは、社員の皆さん。服装は自由、背が高く、表情明るく、動きが軽やかに見えた。年齢・時代の違いを身に沁みて感じた。

会社は人が動かす。百聞は一見に如かず。

湘紅会の平均年齢八十才を越えた。代表世話人を引受けた時、役目は高齢化に合う企画、会報で交流、世代交代と考えた。

四年過ぎて、少しずつ実現し、湘遊会は二代目の新チーム、新たに、音楽とスポーツ観戦も楽しめそうだ。ゴールへ、もうひと走りと思っている。

会員随想、皆さまから魅力あるご寄稿を頂き、感謝しております。

ワクチン四回目いつ打つか、決められましたか。ご自愛の上、おげんきにお過ごしください。

湘紅会報 2022 年 7 月第 8 号

編集人 酒井尚平